現職日本語教師研修のための
新規上級会話教材開発と実践報告

小野寺　志津　　杉浦　千里

要　旨

２回目を迎えた韓国京畿道の現職日本語教師のための研修に向けて、新規会話教材を開発することとなった。今年度の会話は中級と上級に分けることとなり、筆者らは上級を担当した。本教材は９回分の授業で構成されている。前半の５回は、ディベートやスピーチ等を通して会話の技術を学び、後半４回は発表会を実施して総合的に日本語の運用力を高めることを意図した。
【キーワード】会話　会話教材開発　ディベート　スピーチ

Development and Report of New Conversation Materials for Japanese Language Teachers In-service Training

ONODERA Shizu, SUGIURA Chisato

【Abstract】This is a report on the new conversation comprehension section of the teaching materials for an in-service Japanese teacher training program for Korean native speakers. We divided the trainees into two groups, advanced conversation class and intermediate conversation class. The authors took charge of the advance conversation class.　This teaching material is composed of nine lessons. The first half is designed for learning conversation techniques through debate and speech, etc., the latter half aims to foster Japanese language ability for giving a presentation and overall improvement.
【Keywords】conversation, conversation materials, debate, speech

１．はじめに

筑波大学留学生センターでは、平成 17 年度から韓国人現職日本語教師のための研修用教材を開発し、それを用いて日韓両国での研修を行っている。今年度は２回目となるが、新たな会話教材を開発することとなった。会話は中級と上級の２つにレベル分けることが決まり、筆者らは上級会話教材の開発を担当した。これを新規上級会話教材と呼ぶ。研修の対象は、韓国・京畿道で日本語を教えている韓国人教師 48 名で、うち上級会話を選択した 18 名を９名ずつ２クラスに分けた。本稿では、新規上級会話教材開発のねらい、作成過程と実践の報告を行う。

２．新規上級会話教材の概要とねらい

上級日本語話者を対象とし、１回９０分の授業を９課分作成した。

２．１　全体のねらい

この会話教材の最大の目的は「いかに研修生に話しをさせるか」である。普段、日本語で話す機会が乏しい彼らに、できるだけ多く日本語で話す機会を提供することが課題となった。また、上級の学習者に相応しい内容や語彙を準備することと、それらを多彩な活動として提示することにも腐心した。この研修で実践した活動を、それぞれの教育現場でも取り入れてほしいと考えたからである。

加えて、ここで行う活動は、具体的なものであり、実際に行う「意味」のある活動でなければならないという点にも配慮した。「練習のための練習」は極力避けるようにした。そのため、取り上げるテーマは高校の教師として考えるべきこと、韓国･日本社会に関することにしぼった。この活動を通じて自分自身を振り返ることができたり、教授内容を豊かにすることを意図した。

更に、「話しっぱなし」にすることのないように構成を工夫した。９回の授業が連続し、「聞く」「話す」技能だけでなく、資料を「読む」、発表原稿を「書く」、「発音のチェックを受ける」など毎回の授業内容が相互に関連し、研修生の日本語を総合的に向上させることをねらいとした。

この３点を念頭において会話教材を作成した。

２．２　概要

教材の概要は、次の表のようになっている。

＜表１．　教材の概要＞

課	タイトル	目標	主な活動形態	言語要素
1	はじめまして （自己紹介）	日本人に印象に残る、効果的な自己紹介を考える。日本人との会話に適切／不適切な話題を考える。 相手から引き出した情報を整理して話す。	・インタビュー ・発表	・インタビューの表現 ・あいづち ・性格を現す言葉
2	喫煙は犯罪だ （ディベート1）	ディベートに慣れる。理由や資料を基に論理的に意見を述べる。メモを取る。相手の意見を聞きながら自分の意見をまとめる。	・簡単なテーマによるディベート（２回） ・教師からのフィードバック	・意見を述べる ・賛成する ・反対する ・理由を述べる ・引用する ・相手の意見を確認する
3	最近の出来事 （3分スピーチ）	聞き手を意識した、わかりやすいスピーチをする。スピーチ特有の表現を学ぶ。日本人が好むスピーチの仕方を知る。良い聞き手の態度を知る。	・スピーチ ・質疑応答	・感情を表す言葉 ・スピーチの構成 （切り出し、出来事、まとめ、引用）
4	学歴社会は無意味だ！？ （ディベート2）	より深いテーマで本格的なディベートを行う。事実、引用、意見を分けて述べる。	・ディベート ・審判	・出典を明らかにする。 ・意見を強調する。
5	韓国社会を考える （討論）	資料を基に論理的に意見を述べる。他の人の意見を聞きながらメモを取る。意見をまとめて発表する。	・討論 ・共同声明文を書く、発表する ・質疑応答	・相手の意見を肯定した上で、自分の意見を主張する。
6	韓国の中高生に伝えたい日本 （日本語で発表） 準備①	（６～８課全体として）日本語で発表ができる。日本に関する知識を増やす。 自分の体験を他者に伝える。共有する。	・グループ討論	・伝聞の日本語 ・わからないことを聞く、頼む
7	準備②	わかりやすく伝えることができる。効果的な発表について考える。	・ペアワーク ・発表原稿を直す ・パワーポイントで資料作成 ・発音チェック。	・同意する ・説明を求める ・発表の表現 ・司会の表現
8 ～ 9	発表会	資料を用いながら、効果的な発表ができる。的確な質疑応答ができる。	・発表 ・質疑応答 ・司会進行	

上記に加えて、１課～５課の授業開始冒頭に「３分間トーク」を行った。ペアになって、１つのテーマについて３分間、とにかく日本語を話し続けるというゲームである。このゲームの目的は、１）韓国語を使う日常生活から意識を日本語に切り替える、２）ある一定時間、相手と協力して会話を継続させる、３）あいづちの練習をすることである。

楽しみながら話すため、双方に飴を５つ持たせ、あいづちも打たずに３０秒以上黙っていた場合は相手に飴を１つ渡さなければならない、３分終了後に飴を多く持っていた方が勝ち、というルールとした。３分間トークで取り上げたテーマは次の通りである。１.「この研修について」　２.「最近気になることについて」　３.「記憶に残っている教え子について」　４.「お互いに相手をほめましょう」　５.「大切なものを相手に説明しましょう」

２．３　各課のねらい

１課：

自己紹介で最も大切なのは、自分の名前を覚えてもらうことだろう。しかし、韓国人の名前を原音通りに発音しても、日本人には聞き取れないことが多い。まず、そのことを理解し、カタカナ式の発音で名乗る練習をする。カタカナ式発音に抵抗を覚えることもあるだろうが、「自己紹介」という目的を果たすためには必要なことである。それを知った上で、どのように発音するかは、個人の選択であるということを理解してもらう。

初対面の話題などにも日韓間で違いがある。このような「違い」に気づき、研修生が日本人と良好な関係を結ぶ自己紹介ができることをねらいとした。この「違いに気づく」ということは、この課のみならず、全授業を通じて重要な課題である。この気づきから、自分の「常識」を相手に押し付けるのではなく、相手の「常識」を一方的に受け入れるのでもない身の処し方を模索する必要があると考えるからである。

２課：

ディベートを用いる利点として、次のことが考えられる。

１）全員が平等に話す時間を得られる。２）一定の時間内に話す、つまり、「だらだら話す」のを防止できる。３）相手の意見をよく聞かなければならない　４）自分の意見に固執して感情的になることが少ない。

つまり、「フリー・カンバセーション」を行うときの問題点を概ね解決することができるのが利点である。まず、こうしたルールを理解し、言葉のゲームとしてディベートを楽しんでもらうことをねらいとした。

３課：

話し手は新出語彙満載の原稿を一生懸命読み上げる。聞き手はよくわからないスピーチを一

方的に聞かされ、徐々に興味を失っていく。こんな授業風景を避けるために、ここでは「聞いてもらえるスピーチ」「聞いて楽しめるスピーチ」をすることが課題である。そのためには、スピーチの構成に工夫が必要になる。更に音声として伝えるために、発声、調子、大きさ、スピードにも留意させる。これらを練習するため、まず、３～４人のグループでスピーチをし、その中から最もよくできたスピーチを選び、全体で再度スピーチをするという２段構えで行う。

聞き手としての態度も重要である。良い聞き手としての態度を知り、発表の後に質問を行うため、メモを取りながら積極的に「聞く」ことを課す。

４課：

２回目に練習したディベートを、ここでは本格的なルールで行う。「学歴社会は無意味だ」というテーマについて、賛成、反対両者の客観的な根拠を予め準備してくることを事前課題とする。ルールを守って話すことで、かえって「自分の言いたいことを思いのまま言いたい」という気持ちが募るので、ディベート終了後、自分の意見を述べる時間をとっておくとよい。

５課：

これまで学んだ会話の技術を用いて、自由に話す時間を設ける。ここでは２つのグループに分かれ、「韓国社会を考える - 継承すべきこと、継承すべきでないこと」というテーマで討論する。ただし、「話しっぱなし」にしないために、討論終了後、グループごとに意見をまとめ、それぞれの「声明文」を発表することを課す。

６課～９課：

後半４回の授業を通じて「韓国の中学生・高校生に伝えたい日本」というテーマで発表会の準備、実施を行う。研修生それぞれが持つ体験を共有し、それを研修終了後に職場に持ち帰って、日本事情紹介の一助となることを意図した。また、これまで学んだ表現や発表の技術などを総合的に活用する機会でもある。

発表は３～５分程度。発表後に質疑応答を行う。発表資料はできるだけパワーポイントを使用する。

ここで研修生に期待される活動としては、「上手な発表の条件を考える」「調べてきたことを伝える」「発表原稿を書く」「資料を作る」「リハーサルをして、相互にアドバイスする」「発音チェックを受ける」「効果的な発表をする」「質疑応答をする」「司会をする」「メモを取りながら聞く」「コメンテーターとして意見を述べる」などが上げられる。発表会終了後、作成資料を基にしてブックレットを作成することもできるが、今回は時間に限りがあり、課題としない。

３．実践報告

３分間トーク（１～５回目の授業冒頭）：

緊張をほぐすための口慣らしとして行ったが、初回から会話が途切れることはなかった。このことから、研修生がいかに日本語を話す機会を求めているかが分かる。職場に日本人教師がいて、普段から日本語を話しているという研修生は、上級会話を選択した 18 名のうち２名しかおらず、ほとんどの研修生は授業中に教科書の本文を読む以外日本語を使う場がない。このような背景からか、「記憶に残っている教え子について」や「大切なものを相手に説明しましょう」といったテーマでは３分間を大幅に上回り、全員が教師という立場からこれまでの体験を話し合うなど、独立した授業になり得るほどだった。緊張を和らげ、会話の授業に入る準備としてはかなり有効な活動だった。

自己紹介（１課）：

「３分間トーク」で緊張がほぐれたのか、初回から発話量の多い活発な授業となった。自己紹介で最も大切なのは名前だが、一度で覚えてもらうために、名前の漢字を説明することと、名前をカタカナ式に発音することの２点に的を絞った。カタカナ式の発音にはあまり抵抗がないものの、実際にどのような発音が日本人に聞きやすいのかが分からないとのことだったので、韓国語と比較し、次の点に注意を促した。

例）名前が선아（seon-a）の場合

１）韓国語の陰母音を陽母音に置き換える。日本人にとって、陰母音は聞き取りにくく覚えにくい。
　置き換えの例）선아（seon-a）→손아（son-a）

２）韓国語には子音＋母音＋子音の組み合わせがあり、最後の子音をバッチム（받침）と呼び、次に母音が続く場合は連音する。日本語では終声が連音することはない。従って、連音で名前を呼んでほしい場合、実際の漢字音とは異なる方法で自己紹介をする必要がある。
　音を連結させた例）손아(son-a/ソンア)→소나(so-na/ソナ)
　손아（ソンア）と自己紹介を受ければ日本人は当然「ソンアさん」と呼び、소나（ソナ）と自己紹介を受ければ「ソナさん」と呼ぶ。「소나（ソナ）」が「손아（ソンア）」の連結した形とは思いつかず、両者を別人の名前だと認識する。

次に、自分の性格を描写する際に、２つ褒めて１つ謙遜するという練習では、謙遜するという行為自体を楽しんでいたように見えた。自己紹介を自己アピールの場と考え美点ばかりを述べるのではなく、謙遜すること自体が美点のひとつであるという考え方に異文化を感じとった

ようだ。

初対面の話題については、年齢や子供、収入、地位などのプライベートに関することは韓国人同士でも聞かないという意見や、親疎によって話題を変えるという傾向が若い世代を中心に広がっているようだ。

ディベート（２課、４課）：

まず、ディベートとは何かという説明を行った。相手を言い負かすことが目的ではなく、言葉を使って相手とのやりとりを楽しむ知的なゲームで、お互いの意見を頭から否定するのではなく、部分的に肯定しつつ自分の意見をいかに上手く主張するかが重要だ。自分の意見を主張するためには、実は相手の意見を聞くことが大切なのだが、「海がいいか、山がいいか」という簡単なテーマを選ぶことで、相手の意見を聞くことに集中できたように感じられた。相手の意見を肯定した上で短い時間の中で自分の意見を主張するというのは、聞く、考える、話すが一体となった有意義な活動であった。しかし、テーマが家族のあり方を問うものや、年功序列を連想させるものになると、若い研修生の口が途端に重くなる。教室内で行うゲームだと理解していても、年長者の意見に反論することに対する心理的な抵抗は、日本人には想像できないほど強いように感じた。しかしながら、終了後、研修生から「自分の学生にもやらせたい」「韓国語でやってもいいかもしれない」「他の人の日本語、他の人の意見を聞くいい練習になる」という声を聞くことができた。テーマさえ慎重に選択すれば、効果的な活動になると考える。

スピーチ（３課）：

最近の出来事を３分スピーチにして話す。聞き手が明確に理解できる「始まり」と「終わり」を設けることをはじめ、整理された内容でスピーチを展開する練習をした。教室は練習の場であると断った上で、聞き手には話し手の日本語が分からない場合には合図を送るように指示し、話し手は聞き手と意志疎通を図りながらスピーチを進めることを目指した。

この回冒頭の３分間スピーチ「記憶に残っている教え子について」が予想より長引いてしまい、本来目指していた２段構えにはできず、また人数も９名だったため、一人のスピーチを全員が聞くという形式になった。しかし、ねらい通り聞き手を配慮した内容のスピーチが揃い、全員が予想外の集中を見せた活動となった。日本語力がある程度均衡していたことも要因の一つであると考える。

討論（５課）：

１クラス 12 名、６名ずつ２グループを想定して設けた活動だったが、１クラス９名、４名と５名のグループになったことにより、１人あたりの発話量が増える。それを見越し、これまでの教室内での発話量と年齢を考慮して教師がグループ分けを行った。その結果、グループ内

での意見交換が活発になり、これまで学んだ会話の技術を用いて自由に話すことができた。グループでの討論終了後、お互いに相手グループの報告を聞くようにしたが、報告に対する感想を述べたり、質問をしたりという行為が自然と行われていた。自分たちのグループの意見を「報告する」という形であれば、「韓国社会を考える - 継承すべきこと、継承すべきでないこと」という重厚なテーマであっても、ディベートの時ほど年齢に左右されないのかもしれない。

継承すべきこととしては、オンドル（床暖房の設備）、伝統料理、年長者を敬う心などが共通している。継承すべきでないこととしては、強すぎる同属意識や学閥、学歴社会、男女不平等、異常なまでの教育熱などが挙げられていた。

日本語で発表（６課～９課）：

上級会話を希望した研修生は、旅行や研修という違いはあっても、全員が何かしらの日本滞在経験を持っている。その体験を共有し、教壇に持ち帰ってもらうというのが活動のねらいである。他の活動と同じく、12 名を想定して時間配分をしていたが、９名２クラスとなったことから、次のように時間配分を変えた。

＜表２．　６課～９課の授業内容＞

６課	日本体験を共有するディスカッション
７課	発表の原稿および資料の作成、読み練習
８課	リハーサル、相互にアドバイス、司会者を選ぶ
９課	発表会（録画、後日上映）

大きな変更点は、９課で録画したものを、コース終盤に行われる研修生全員が集まる選択科目成果発表会で上映するという点である。結論から言えばこれが研修生には大きな負担だったようだが、発表の内容を上級会話受講者だけでなく、研修生全員で分け合えたことの意義は大きい。成果発表会では、全員の発表を１分ずつほどのダイジェストに編集したが、すべての様子はウェブサイトで見ることができるようになっている。また、この上映会が上級会話に参加した研修生の緊張感を最後まで持続させる活動だったと思う。

発表会で用いる資料については、他の科目の課題との兼ね合いがあったため、何かしら視覚に訴えるものであればパワーポイントでなくても可とした。実際に用いられた資料は、パワーポイントはもちろん、ブックレットから手描きのイラストまで様々だった。

リハーサル、発表会本番とも選出された司会者（各グループ２名ずつ）が進行することにより、発表会で必要な表現を学ぶことができた。司会者の日本語は、聞く機会は多いが学んだり使ったりする機会は少なく、貴重な機会になったのではないだろうか。全員が自分の日本体験、それにまつわるエピソードや考えを述べることができたことも、成果のひとつであると言える。

４．今後の課題

教材開発から実践までを担当し、いくつかの反省点が見えた。まず量の問題である。新規上級会話教材は宿題を最小限に抑え、話すことだけに取り組めるよう配慮した。具体的には次回使用する文型を各自読んで確認する、という予習作業を宿題にするにとどめた。しかし、このような形の宿題は、終えているかどうかの確認が難しく、宿題の消化が不十分な研修生は該当の文型を使えずに終わってしまう恐れがある。この事態を避けるためには、クラス内で該当の文型説明にさく時間が多少なりとも必要だろう。しかし、ディベートや討論のように、学ぶべき文型が多ければ確認にも当然時間がかかる。本教材の構成は、文型の確認を完全に終えていることが前提になっているが、研修が中盤に差し掛かると、他の科目との兼ね合いが生じ、必ずしも全員が文型確認を終えている状態とは言えなかった。さらに、開発した教材に資料として関連する文型や説明を載せたが、上級会話教材に限っていえば、授業内で消化しきれないページがあることが、達成度の面から研修生に不満を残したのではないかと考える。来年度の研修に向けて、授業内で文型を確認する時間をとり、全てを消化できる量の教材に改訂すべきではないだろうか。

次に内容についてであるが、開発した新規上級会話教材は、授業を担当する講師に韓国語の知識があることが望ましい。特に「１．はじめまして」では、韓国語をカタカナ式に発音することを目標のひとつにしているが、カタカナ式にするためには、少なくとも日本語と韓国語の母音の対応を理解していなければならない。今回は開発を担当した筆者が講師として派遣されたが、今後、教材は開発者の手を離れる。その時に備え、詳細な教師用マニュアルが必要だろう。

討論、ディベートのテーマも再考が必要である。年長者を敬う文化的特徴が色濃い韓国では、たとえ授業の一環であっても年長者の意見に異を唱えることは難しい。今後は「夏がいいか冬がいいか」などの簡単な命題を数多くこなす形式にするか、あるいは、全研修生に共通している教育現場の問題を取り上げるといった配慮が必要であろう。

最後に行った、日本語での発表会のダイジェストを成果発表会で披露するというのは、研修生の負担をさらに大きくする結果を招いてしまった。そもそも、発表会をすることや成果発表会での披露が目的ではなく、発表会に至るまでの過程が目的であったのに、成果発表会を課したことにより目的が曖昧になってしまった。成果発表会での披露は、クラスの人数が９人という現地での状況に合わせて追加したのだが、完璧な発表会を目指したリハーサルよりも、発表会を授業の活動だけにとどめ、発音やイントネーションの指導に時間を費やすべきであった。これは今回最大の反省点である。今後は、韓国人学習者の発音の特徴を予め押さえ、その場での発音指導を心がける必要があるだろう。

以上、実践を通じて明らかになった問題点を列挙したが、今後、これらの課題をひとつずつ解決し、より良質な会話教材の作成を行っていきたいと考えている。

参考文献

荻原稚佳子他（2005）『日本語上級話者への道』スリーエーネットワーク

鎌田修（1998）『中級から上級への日本語』The Japan Times

国際交流基金関西国際センター（2004）『初級からの日本語スピーチ－国・文化・社会についてまとまった話をするために』凡人社

須見恵二（2003）『中上級日本語ディベート教材－ビジネスを中心に』凡人社

東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編（1995）『日本語口頭発表と討論の技術－コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』東海大学出版会

西部直樹（1998）『はじめてのディベート－１発でできる SUPER ラーニング』あさ出版